

無宇宙の「^ヒ零」と宇宙の「^{くらゐ}空零」

／ まず「大宇宙」は「無宇宙」と「宇宙」とに分かれる。

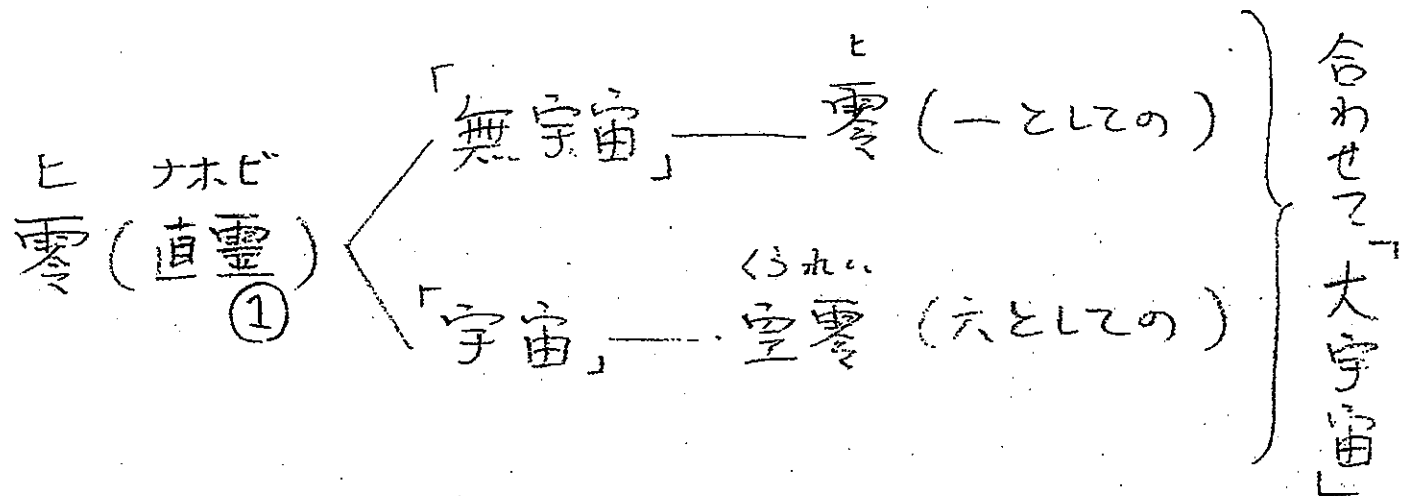
即ち、「結ばれざると」と「結ばれたるミ」である。

「宇宙（^{くに}國）」全体を、統一体としては「全宇宙」とも称する。

単に「宇宙」とだけ言った時には、しばしば、「全宇宙」の構成要素である個々の「箇体（小宇宙）」を意味している
ので、注意が必要である。

／ また、数理としては、「無宇宙」の側にある「^ヒ零」は
「^{いち}一としての零」であり、「宇宙（全宇宙）の側にある「^零」は
「^{ふく}六としての零」である。実体としては同じ「^ヒ零」なのだが、
「箇体（小宇宙、数理としては五）」が成立する以前の「^ヒ零」
が、その後の「^{あと}零」かの違いである。

／ 前者は「箇体」の成立に際して「中心」となり得るが、
後者はもう「中心」とはなり得ない。他の「箇体」に
「外郭」として組み込まれるだけの存在であり、
「^{くらゐ}空零」と称される。



「宇宙」

統一体としては「全宇宙」

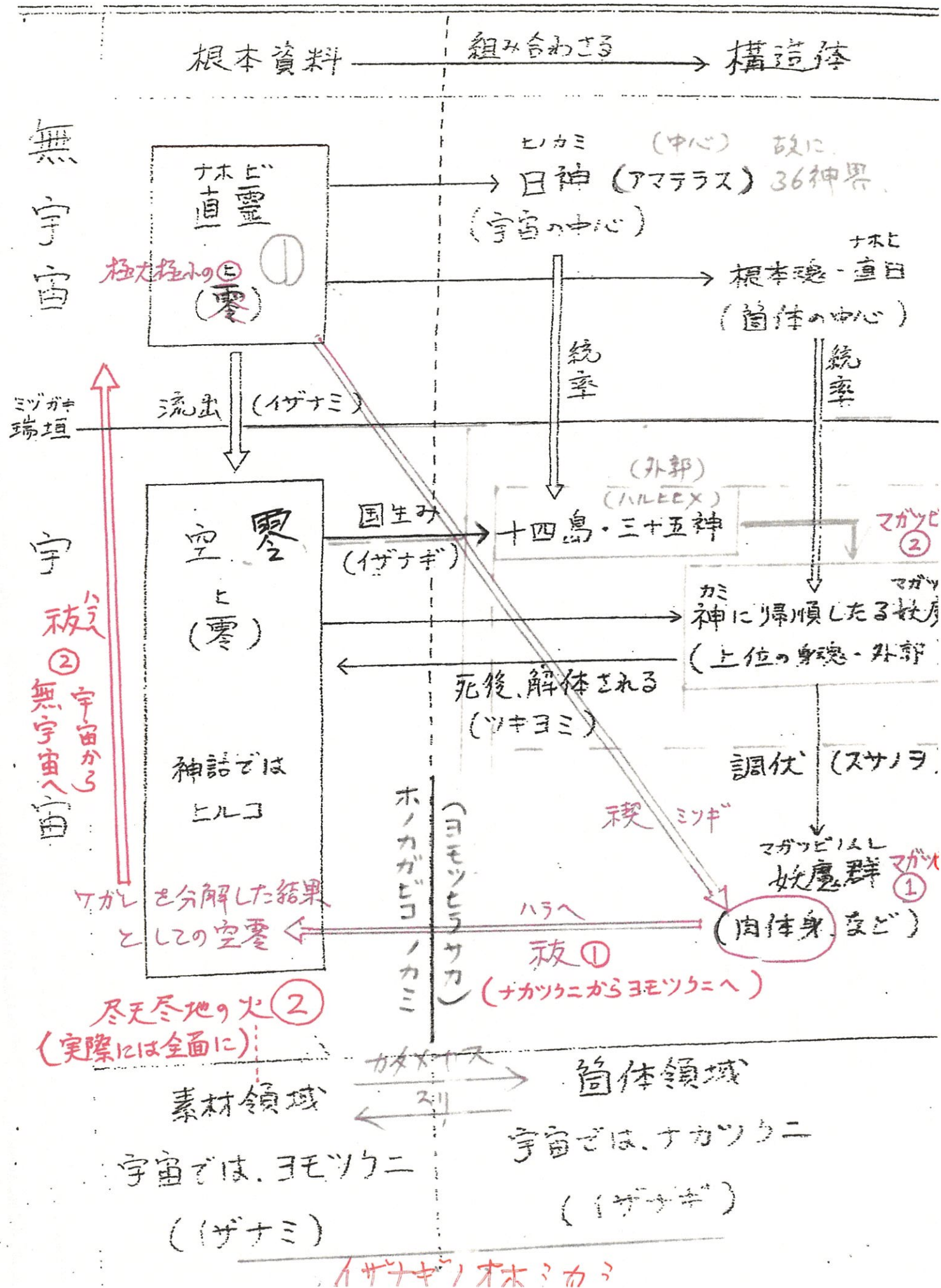
個々の「個体」を指しては「小宇宙」

ナホヒ
直靈 ① …… ヒの段階のナホヒ、零そのもの

直靈 ② …… ヒの段階のナホヒ

結び止めたる靈、即ち魂、ソマノヲ

修理田氏の機能図 直霊と空零



付表 オホミマノハラヘ

御身之禊によりて成りませる 十四神 一覽

言霊の幸
66頁より

番号	神名	集合名	その内容
1	ヤリマガツヒノカミ 八十禍津日神	ワガレ 黄泉国の穢に因りて	カミ ナ マガツヒ 神と化りたる妖魔
2	オホマガツヒノカミ 大禍津日神	成りませる二柱	
3	カムナホビノカミ 神直毘神	マガ 其の禍を直さんとして	
4	オホナホビノカミ 大直毘神	成りませる三柱	//
5	イズノメノカミ 伊豆能売神		
6	ソコツ フタツミノカミ 底津綿津見神		イザナギノオホミカミ
8	ナカツ 中津 //	三柱の綿津見神	伊邪那岐大御神の 氣吹の狭霧 イブキ ケガリ
10	ウハツ 上津 //		
7	ソコツ ツノヲノミコト 底筒之男命		
9	ナカツ 中 //	スミノエ オホカミ 墨江の三前の大神	//
11	ウハツ 上 //		
12	アマテラスオホミカミ 天照大御神		
13	ツキヨミノミコト 月読命	ミハシラノウヅノミコ 三貴子	ト 尽天尽地の史としての 伊邪那岐命 イザナギノミコト
14	タケハヤ スサノヲノミコト 建速須佐之男命		

2020.9.1.

ナホヒ

直霊

無宇宙にある素材としての零

(ヒ)の段階にあるものまで含めて言う。

ナホヒ

直霊

ナホヒ

直霊

の神 本来の神

「素材としての直霊」とは、区別される。

普通は (タ)の段階にあるアマツカミである。

新津日神

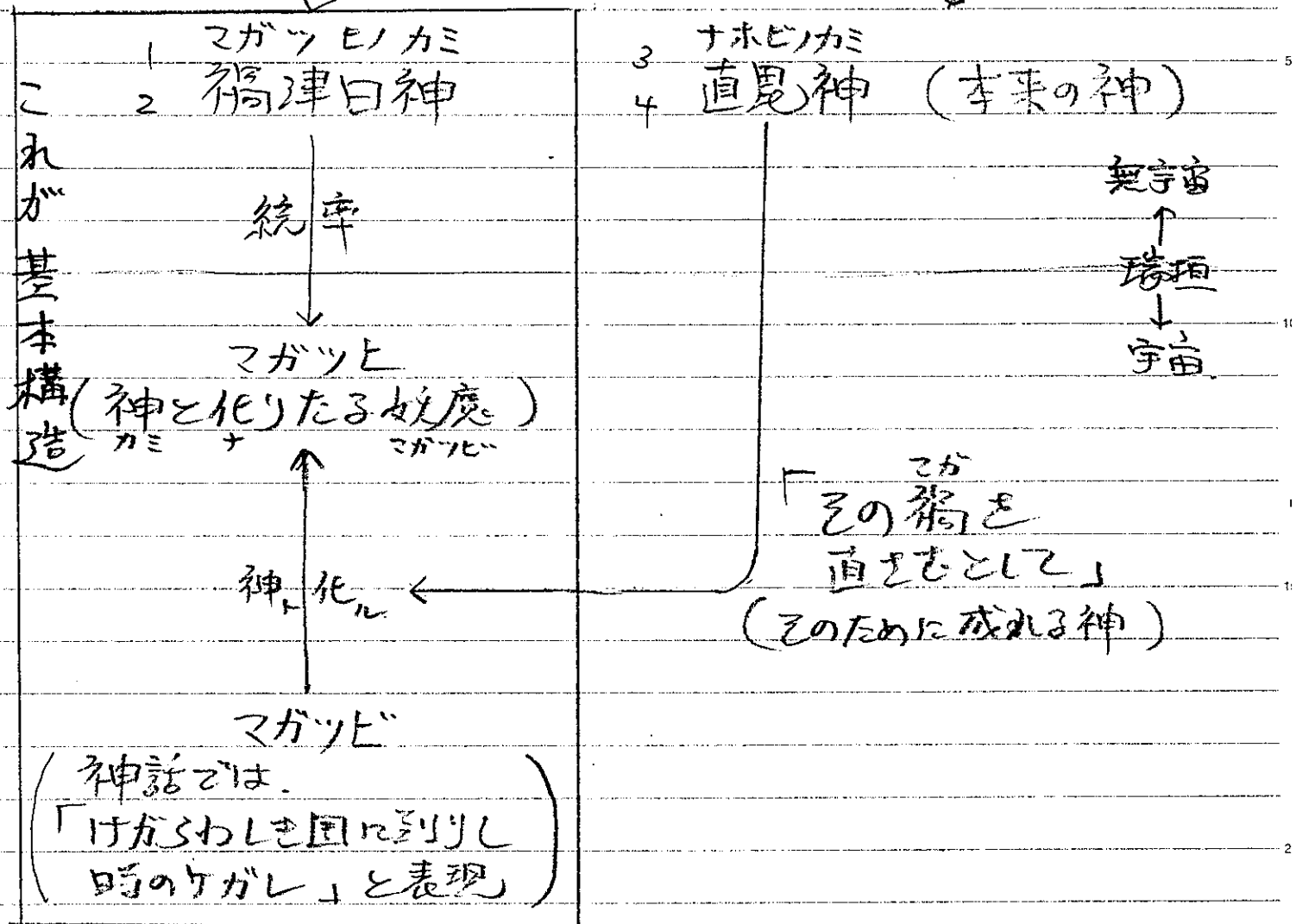
「それ自身がマガツヒである神」ではなく、

「マガツヒを統率するところのヒノカミ」のこと。

(幸83では、イザナギのた化神(化身))

付表No.

(分掌神 2/9)



「けがれ」と
「汚垢に因りて」は、「けがれをマガツヒに変えて
統率せんがために」くさいの意味

日本民族が日本語としての神言靈を忘れ佛教が傳ふるところの阿彌陀佛音を唱ふるもののみ多きが如く基督教徒が正しき神言靈を傳へながら之れを奉唱することを知らずして反って禍津毘の禍言を唱へつつあるが如く各國各民族は相率ゐて分裂分散に走り下向轉落しつつあるは悲しむべく憂ふべきの甚しきものである。

たまたま言靈を云ふ者はあつても全音義の何たるかを忘れて居ること柿本人麿をはじめとして近時の言靈學者と称するものの皆然るところで為に却つて甚しき謬見邪説を出して世を毒し人を苦しめて居る。

ふるべゆらと古典に載せたのは斯のような禍津毘の禍言を指したので之れは五音二言の禍言靈である。これに由良止袁布留込の七音を加へて布留邊由良

由良止袁布留邊の十二音三言と成す時は禍津毘調伏濟度救出の神音と化るので阿三忙銀儼合吽吽尾觀南の音は禍言であつて阿三忙銀儼合吽吽尾觀南吽但羅合吒悍漫の音は佛言で禍津毘たる六種外道を調伏し濟度し救出するの祕言密語であるとの秘言靈で神直靈の神言である。

布留邊由良由良止袁布留邊
ふるべゆらゆらとをふるべ。
ぬなとももゆら。

浅間山人こそ仰げ眞賢木の緑色濃く照りにぞ照りたる。

資財を用ゐず材料無しに事業の成立つと云ふことはない。不正不美不善なるが如きも一切は命である天命である。之れを使用するは直日であり神直日であり直靈であり神直靈であり神日本磐余比古である。之れを阿知米阿知米於於と教へられてある。

「^{エト}直日」も「^{カミノエト}神直日」も（中略）。

「アタメ、アタメ、オオオ」も、無宇宙の側の実在を指して
言う名称である。

そして、無宇宙の側の実在は、常に

宇宙の側にある存在を「資財」として使用する立場
にある。

人間においては、^{ナホヒ}直日が使用する側であり、

^{ミタマ}身魂は使用される側の存在である。

故に「エト」としての主体は^{ナホヒ}「直日」であり、

それ故に、ここでは「直日」と書いて「エト」と読ませている。

4. 故に、「ふるべゆら、ゆらととふるべ、ぬなとももゆら」は、

全体として「マガツビを救出し、これを無宇宙の零^ヒにまで
分解して、次の何らかの資料とする」ためのコトワケとなる。

3. 「宇宙化育の秘神業」^{ヒメカミツサ}を表現したコトワケが
(ス)とカタメナス) 「ぬなとももゆら」

2. このマガツビを、
調伏済度救まする
神言カミノコトバ

「ふるべゆら
ゆらととふるべ」

1. マガツビ マガト
禍津鬼の禍言

「ふるべゆら」

マガツビをれ自体と
指す用語か？

ナホビの妙用

(4/10)

主体	別天神、神ならざるの神、神魔同凡のカミ (別名、大禍津日) オホマガツヒ
↓	
その作用	(実際には、多数ある作用力のうちの一つ) 直霊の妙用、マガツヒ (神に帰順した禍津毘) の活用。 ナホビ マガツヒ
	ヒ 「零」なる霊
	ニギミタマ
第一段階	1. これが、直日(中心)の統率のままに ～ と成る。 ナホビ
	↓
	妖魔群団身 (中心の統率に従っているのだから、 ウシミタマ サキミタマ これは「神に帰順したマガツヒ」である。
第二段階	2. これが、妖魔軍として (妖魔のままに) ～ を調伏済度救出する。
	↓
	他の妖魔 (まだ神に帰順していないマガツヒ) マミタマ アラミタマ
└→	こうした二段階の妙用によって、 太平嘉悦の樂土(神國)が築成される。

古人が「ナホビ」といふ神言
 靈に、直靈の支那文字を充當し
 たのは、靈の直く正しくして、
 妙用を現はすといふ意味なので、
 靈の字を解けば、すぐに知るこ
 とができるのである。

靈は、零と讀む。

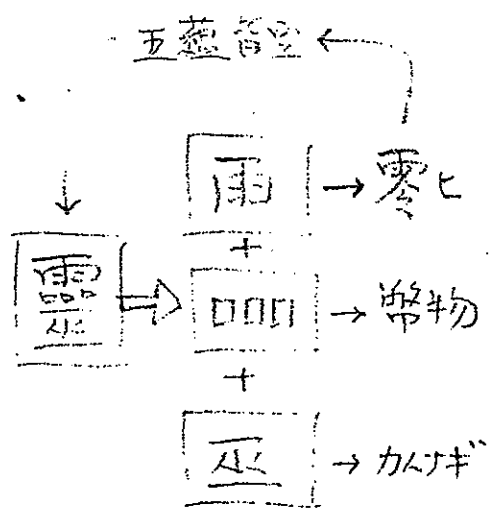
零とは空零で、○で佛教にい
 ふところの五蘊皆空の義で、六
 道で六趣で、五に封するの六で、
 中心無きもので、宇宙を築かざ
 るものであるから、箇體でない

のである。

空零の下に「𠂔」「巫」の二文
 子がある。

靈の雨は零の意味。

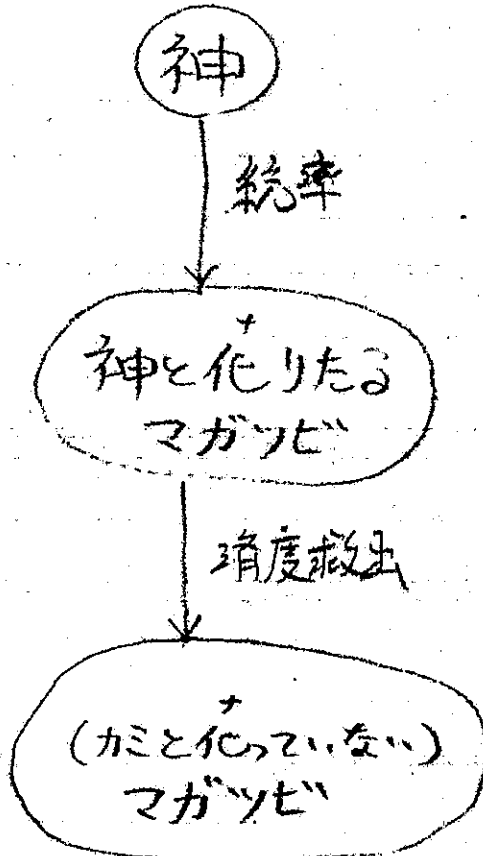
「巫」はまた、「工」と「从」
 との合成で、「工」は机で臺で、
 象形の文で、高杯の形である。
 「从」は人で、兩人で、「工」
 の下に恭敬奉侍の指事が「巫」
 である。「カムナギ」である。
 その上の「𠂔」、「𠂔」、「𠂔」
 などと書いたのは、物の象形で
 指事で、多くの幣物を表示して
 をる。
 「𠂔」が多数だとは数理なの
 である。



この文字自体は
 単なる「奇靈」の意味
 かしら

↓
 直く正しい奇靈に
 限る。
 直靈と稱する。
 ナホビ

「巫が多く、の幣帛を捧げて零の
 下に、蹢躅と跪いて居る。」
 これが、靈の字義なので、エ
 蘊は皆空、皆空であつて異靈空
 怪である、との意を示して居る。
 その奇靈の正誠正義の妙用が
 相が「ナホビ」であるから、レ
 の意に依つて直靈と書いたのだ
 直靈とは妙音觀世音で、觀自左
 身であるところの觀世音菩薩か
 のである。



カミ (人間身では、画日)

ハルヒヒメ (シコメ) 35.

(マガツヒを調伏するためには、自分もまた
マガツヒの様相を呈せざるを得ない
(幸身魂・奇身魂)

ヨモツシコメ (妖魔群)

人間身で言えは、肉体身と真身魂

(327 頁後半)

天照大御神の
天河原アモノカハラ

天(やど) → 宮ミヤ
天目 → 秘ヒメ
天の道 → 天浮橋
アモノウキハシ

須佐之男大神の
須賀宮スガノミヤ

大国主神が
天詔琴アメノリゴトを
なきなし給ふ処

八雲立つ
出雲の国の秘宮ヒメミヤ
(出雲大社)

一方、
伊勢神宮は
単独で、五つの階層全体を
象徴している。



(323 頁 7 行目他)

「^{ヒト}零^{カミ}の神」

(323 頁)

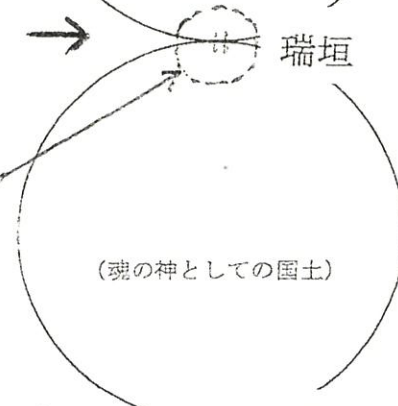
隠身カクリミの神
純男ヲノカギリ神聖カミ
天祖アメノミオヤ
天津神アマツカミ

⑦ 零の神の多くは必要に
応じて奇身魂をまとい、
に降りて魂の神と
しても活動するので、
同じ神名でも区別を要する

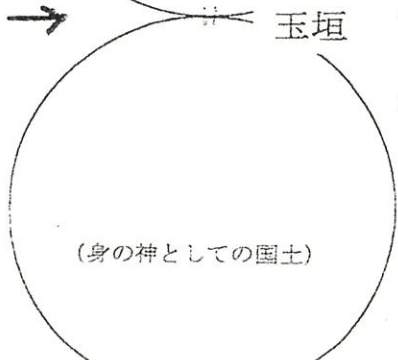
(326 頁末～327 頁初)

次第次第に
精より粗に転化

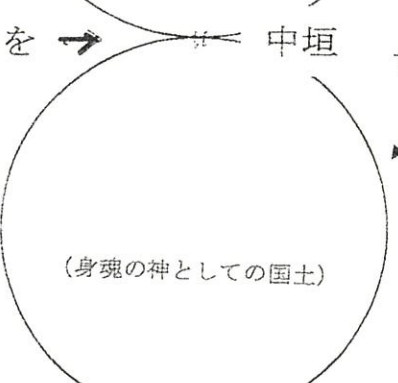
単純より複雑にと
組み直される



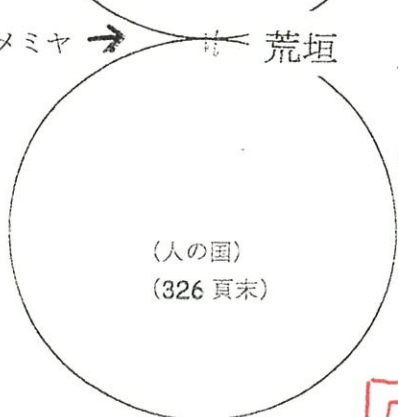
「^{タマ}魂^{カミ}の神」



「^ミ身^{カミ}の神」



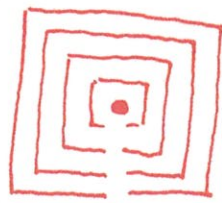
「^{ミタマ}身魂^{カミ}の神」



「^{ヒト}人^{カミ}の神」 = 「完成された^{ヒト}日止」
奇身魂
直日

日少宮 ヒワカミヤ

日隈宮 ヒスミノミヤ



四重の垣は各々、(内側から)
瑞垣、玉垣、中垣、荒垣の象徴
中心の本殿は神界を表す。

2020.2.18.(火)

NO.

DATE

ヨモツクニ
素材領域

ナカツクニ
簡体領域

ヨモツクニ
素材領域

無^き (極大極小のた)

直日

奇

同下

幸

真

荒

瑞垣

大
致

普通は省略してこ
表記するが、実際には、
A→Bの2段階

より粗雑な部分は
そのままに焼かれ
ハラへの対象となる。

より精妙な部分は
包み直されて、
このミタマへ。

(尽天尽地のた)

流出

と

帰還

(生)

(死)

(ヒ) ----- コトアツカミの領域

ミタマ
御霊

(ヒカリ) ----- アマツカミの領域

直日 (第一魂)

直日 (第一魂) ミタマ
御魂

(第二魂)

霊

(第三魂)

心

思考

身体

身魂

ミタマ

生命力

(肉体身の中)

ウシミタマ

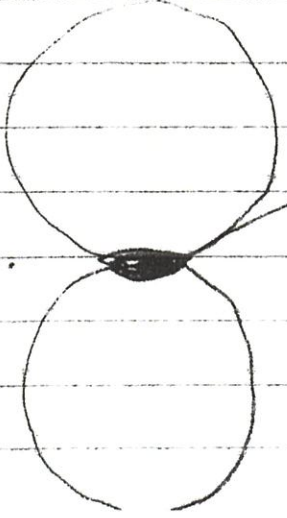
サキミタマ

マミタマ

熱宇宙
↑
↓
宇宙ウツカミ
の領域物理次元における生命力
(内体身の中にある)日陽宮で組み直されて、
次第に精から粗へと
次元を降って来る。→ 逆に粗から精へと
組み直すことで、
次元を昇ってゆく。

(4つとも)

球と球との接触点を「日陽宮」と呼ぶ



直霊と空零

無
宇
宙

宇

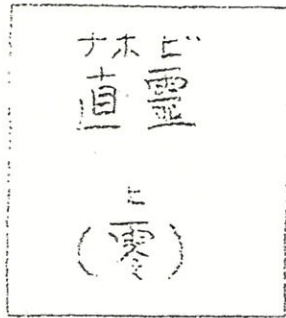
宙

根本資料

組み合わせる

→ 構造体

(7レ)



ヒカミ

→ 日神 (アマテラス)
(宇宙の中心)

→ 根本魂 - 直日
(直体の中心)

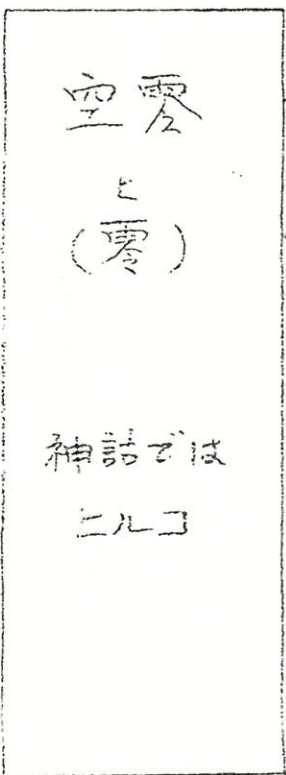
流出 (イザナミ)

統率

統率

状況・状態を表現
する言葉

国生み (イザナギ) → 十四島・三十五神



死後、解体される
(ツキヨミ)

① カミ ② マガツビ
神に帰順したる妖魔

(上位の身魂・外郭)

クシミタマ
サキミタマ

調伏 (スサノヲ)

③ マガツビ
妖魔群

(肉体身、など)

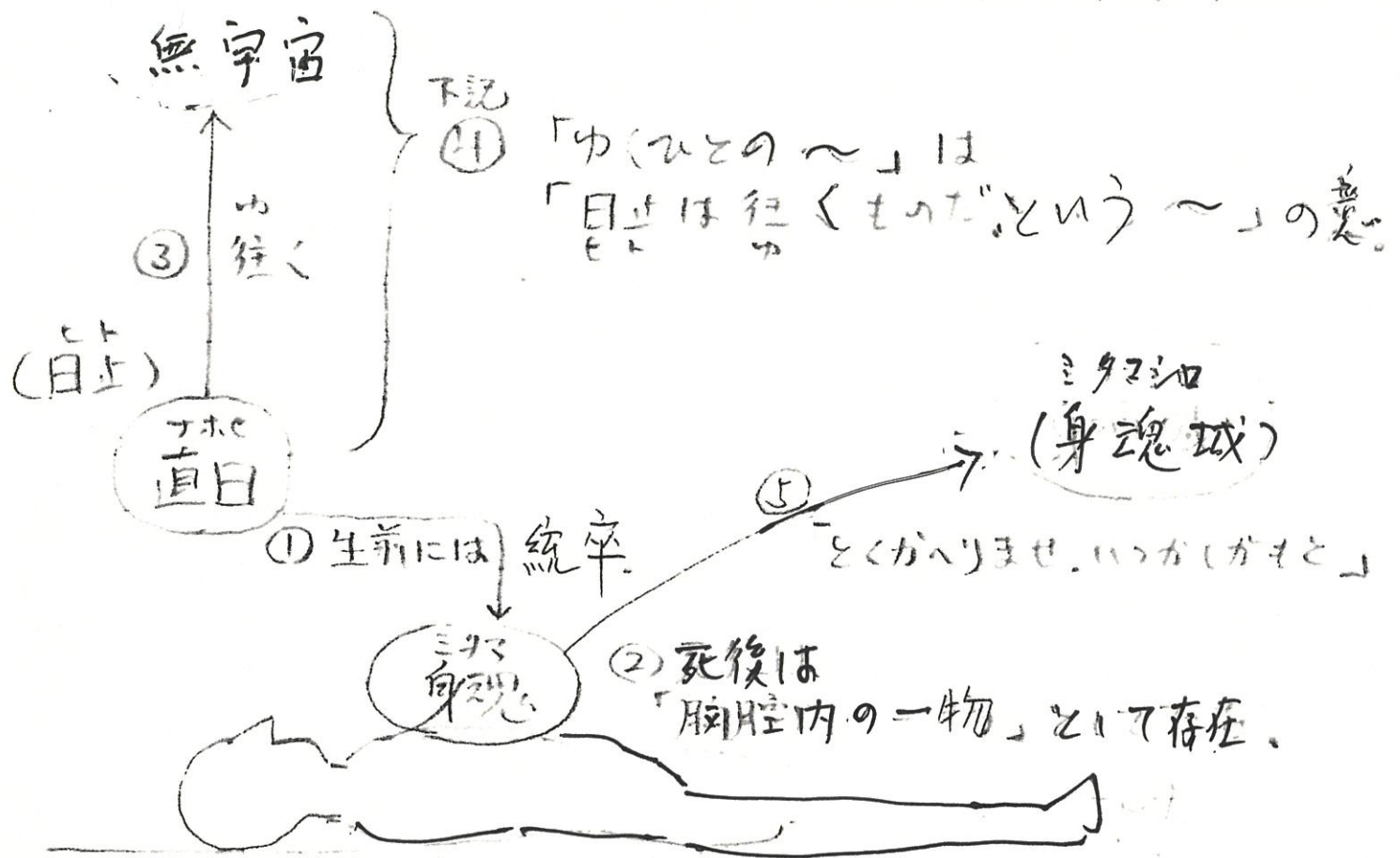
カタメナス

素材領域

→ 直体領域

宇宙では、ヨモツクニ
(イザナミ)

宇宙では、ナカツクニ
(イザナギ)



④ 人間の死後、その^{ナホヒ}直日^{ヒト}(目止)は必ず無宇宙へ往く。

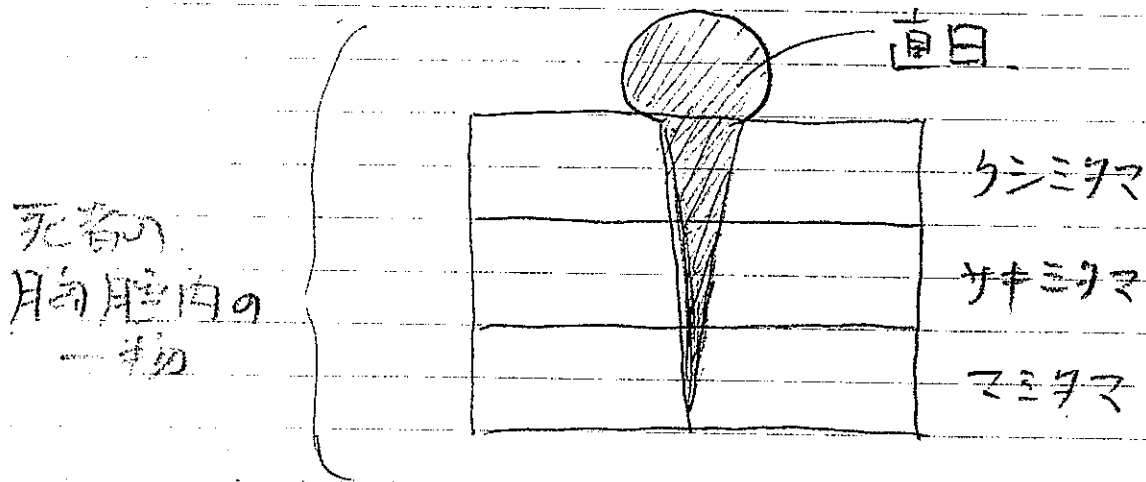
「そういう道理を理解できたのであれば」という意味で

「心知れらば」と述べている。(⑤の前提条件)

宇宙と無宇宙との関係における、

こうした「必然の道理」を称して、「如是」とか

「かにかくに」などと表現する。



→ できるだけ多くの要素を、図の斜線部分に
つけ加え、その上で、直日の昇天とともに、
この斜線部分をも無字宙へと送る。

2020.9.1.

ナホヒ

直霊

無宇宙にある素材としての零。

(ヒ)の段階にあるものまで含めて言う。

ナホヒ

直毘

ナホヒ

直霊

の神、本来の神。

「素材としての直霊」とは、区別される。

普通は (ワ)の段階にあるアマツカミである。

高津日神

「これ自身がマガツヒである神」ではなく、

「マガツヒを統率するところのヒノカミ」のこと。

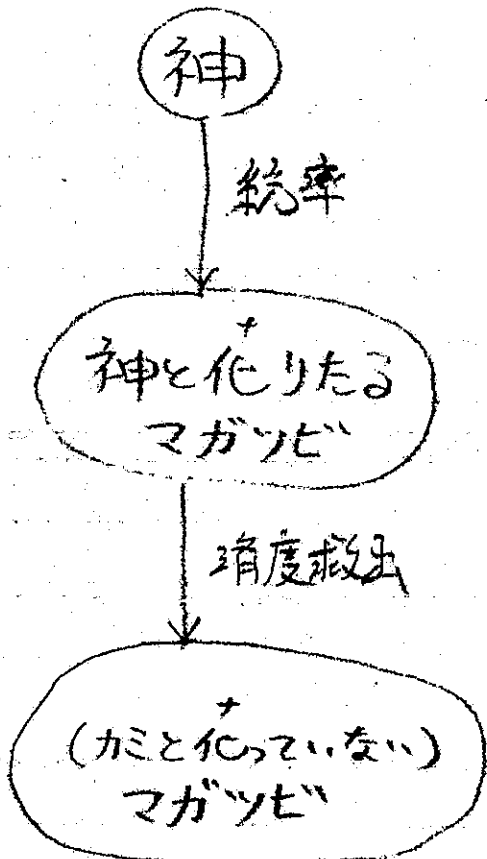
此の詩は、正誠正義であれば正位正業を得て、山河大地も一圓光明体なることを実証し得らるるのであるとの意を詠んだので、正誠正義が「火」で「日」で「光」であることを教へて居る。

正誠正義にして神國を築くのが日神事で、之れを成さしむるは直霊の妙用である。直霊の妙用と云ふのは「ヒ」なる霊が、直日の統率のままに妖魔群回身と成り、妖魔軍として妖魔を調伏済度救出するの意で、妖魔なる禍津昆が直く正しく妙用を現する神と化り神の神業を以て太平嘉悦の楽土を築成するの義である。

神に帰順した福草霊の活用だ

と云ふに等しいので、大禍津日とも称へて、神ならざるの神である。古事記に「別天神」と記したのは、此の意味であつて神魔同凡に在るのである。

神と魔が同凡に在るのは神ではなくて神人であるから尊と称へて、独神とも隠身とも萌騰之物とも天神諸命とも神聖とも純男とも人とも独化之神とも俱生之神とも一神とも別神とも天祖とも祖神とも二柱神とも傳へたところの命（みこと）で天命（いのち）で大道（みち）であります。之れを祖神垂示の大道と呼ぶことが出来る。



カミ (人間身では、通日)

ハルヒヒメ (シコメ) 35.
(マガツビを調伏するためには、自分もまた
マガツビの様相を呈せざるを得ない
(幸身魂・奇身魂))

ヨモツシコメ (マガツビノムシ) (妖魔群)
人間身で言えば、肉体身と真身魂

人間身においては、

直日 (本来の神)

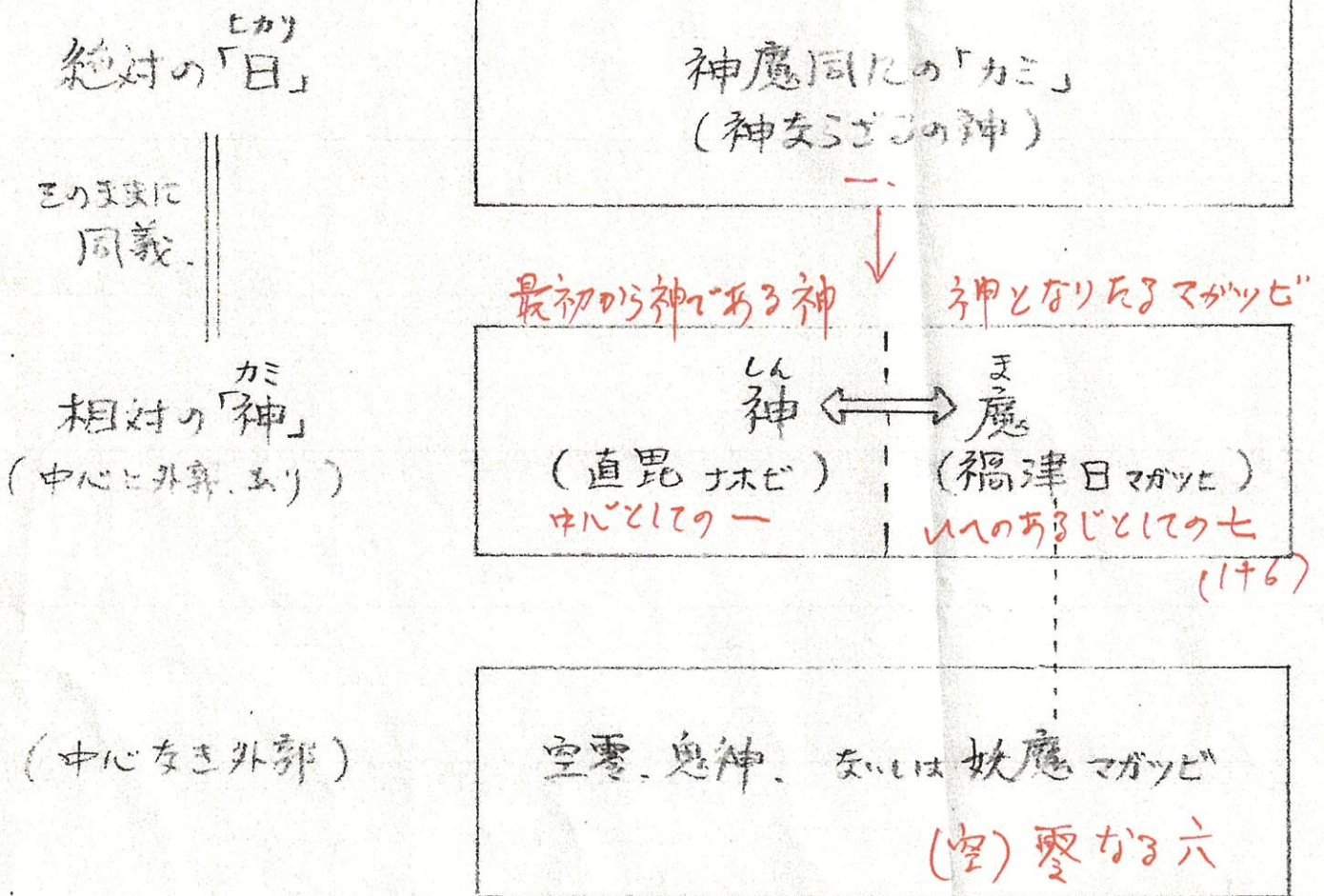
サキタマ・クシタマ (神に帰順した子でガツビ) → でガツビ

でガツビ②

アラタマ・マタマ (まだ充分には神に帰順
してないでガツビ) でガツビ①

幸. 70頁の解説.

「神」という用語は、文脈によってさまざまな意味範囲で用いられてしまうので、解りにくい。この文脈では下記のとおり。



ナホビの妙用

(4/10)

主体	別天神、神なるざるの神、神魔同凡のカミ (別名、大禍津日) オホマガツヒ
↓	
その作用	(実際には、多数ある作用力のうちの一つ) 直霊の妙用、マガツヒ (神に帰順した禍津毘) の活用。 ナホビ マガツヒ
	ヒ 「零」なる霊
第一段階	1. これが、直日(中心)の統率のままに ～ と成る。 ↓ 妖魔群団身 (中心の統率に従っているのだから、 ウシミタマ サキミタマ これは「神に帰順したマガツヒ」である。
第二段階	2. これが、妖魔軍として (妖魔のままだに) ～ と調伏済度救出する。 ↓ 他の妖魔 (まだ神に帰順していないマガツヒ) マミタマ アラミタマ
└→	こうした二段階の妙用によって、 太平嘉悦の樂土(神園)が築成される。

2020.2.18.(火)

NO.

DATE

ヨモツクニ
素材領域

ナカツクニ
箇体領域

ヨモツクニ
素材領域

無^ヒ宇宙
(極大極小のた)

直日

瑞垣

奇

同下

幸

普通は省略してこう
表記するが、実際には、
A→Bの2段階

真

より粗雑な部分は
そのまま火に焼かれ
ハラへの対象となる。

より精妙な部分は
組み直されて、
上のミタマへ。

荒

(尽天尽地のた)

2019.10.15 (火)

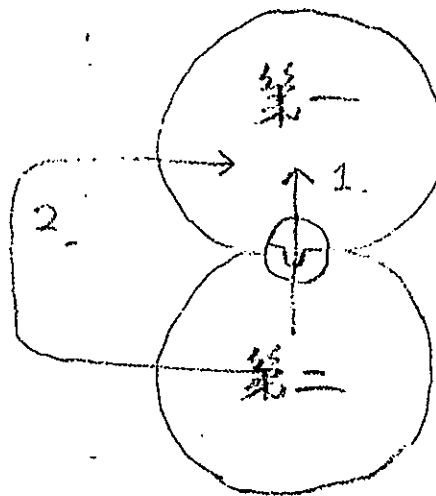
階層間をト下する際^{ヒスミノミヤ}は、日隈宮で「組ッ直される」訳だが
 この宮は、或る意味では「無宇宙」である。

無宇宙 <

> 宇宙

これと全く
 同様の
 考え方に

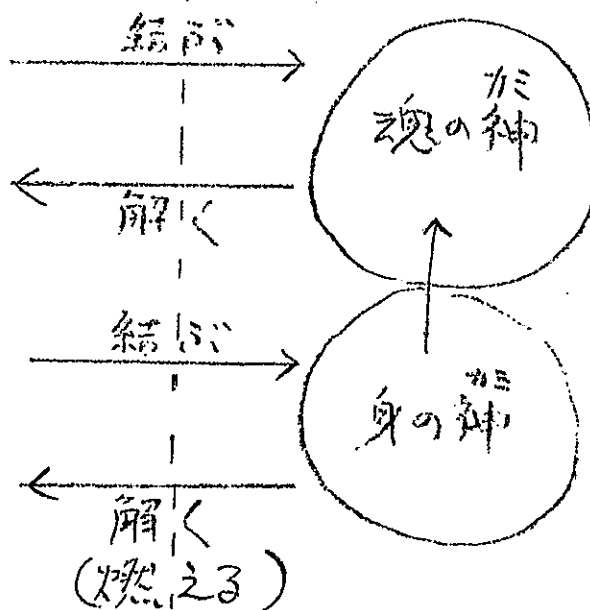
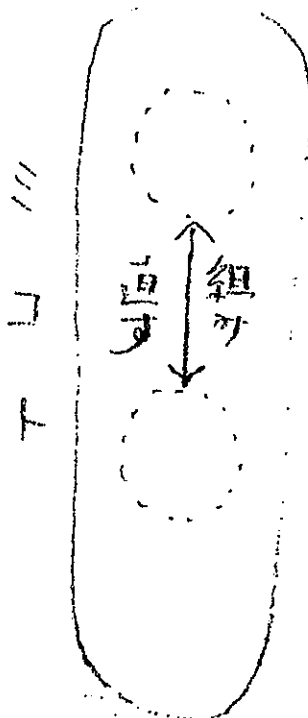
組み直す



1. 普通は
 解いて解いて
 こう考へているが、

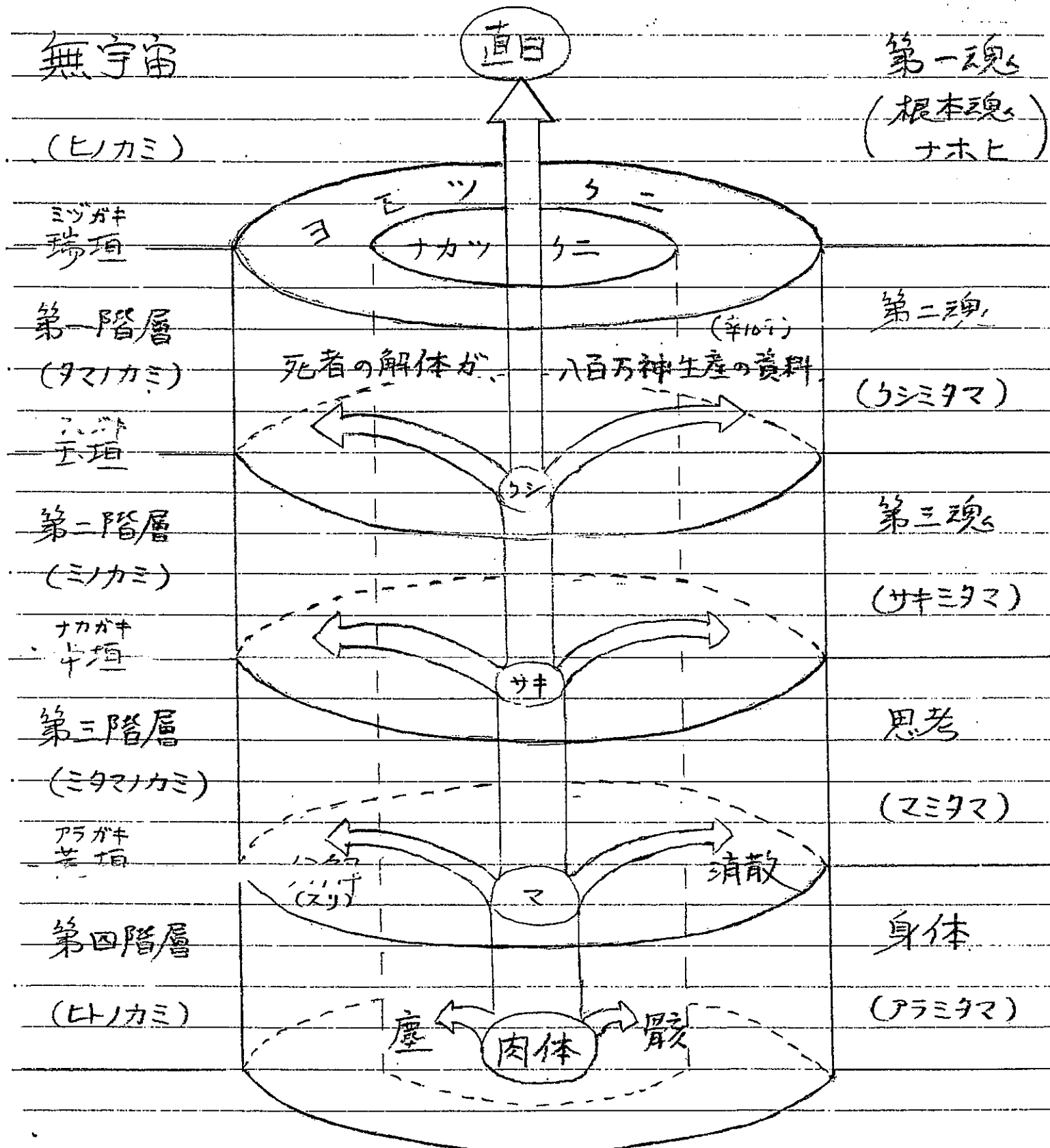
2. 実際には
 無宇宙を経由して
 組み直している。

ヨモツクニ ← → ナカツクニ



はたふき

死者のミタマと月読命の作用



分割けることのできない

宇宙ろ有一切合切の

根本種子で象形は魂

①と描く

日←

(根本中心)

(第二魂以下)

人身解脫

直日

身魂

死者の魂

タマシヒ

止まり居る
計て
を祈る

身魂城

集める

国津神

産土神

五可新河本

(いはば帰る大根本)
(無の有 一零の一)

ミタマシヒ

(直日と根本中心と) 群衆魂

= 霊念思方 (ココロ) 心結目眩したもの

統一魂との肉体身 ↑

王の緒 ↑ 魂と魂

魂

うた

「ウタ」とは「カミ」なり。

今人の歌謡と呼ぶは、音楽なり詩歌なりと称して、人の感情思想の一部を詠出するものなりと定義を立て居れども、日本民族伝承の「ウタ」とは、斯の如き狹隘なる浅膚なる卑俗なる低劣文芸を指したるにはあらざるなり。

「ウタ」とは「カミ」なれば

「ノリト」なり。

「神言霊」にして「カツラギ

ノヒトコトメシ」なれば、一音

響の示音なり、神音なり、妙音

なり、観世音なり、妙音観世音

なれば梵音なり、海潮音なり、

阿弥陀佛音なるなり。

葛城野一言主

日本民族は幸にして、許多の「ノリト」を傳承せり。

今日之れを類別して後世子孫に貽さんと欲す。

アチメ オオオ。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウウウ。ウ。ト。ウト。ウ。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

ハルヒヒメハルヒヒメハルヒ

ヒメ。

アチメアチメ オオオオオ。

ア。

ウ。

以上 昭和十年七月七日

大日本祓禊所 語部宮

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

はるさめのおとこそたたねく
さもきもみどりいろますはるさ

めに。

春雨の音こそ立たね草も木も
緑色増す大和國原。

白百合の咲きたる宿に我れ遊
ぶ瀧のとどろく山の峽間に。

以上

神言霊としての観音經の発立目と其の意味

法華經

多田山公台秘稿

法華經は諸經中の王なりと古
来高僧の讃仰したるところなれ
ども、之れが阿彌陀佛音を説示
したるものなることを解説した
るを聞かず。

日蓮上人の法華宗旨を宣揚せ
るも、單に法華經を讃美して、
觀其音聲皆得解脱の梵音を説か
ず。

唱名念佛を教ふるも佛名が海
潮音にして妙音觀世音なること
を云はず。

日本古典に傳へたる神名が神
音にして神相にして神なること
を説かざることも、猶太教が神
名奉称の神儀を忘れたると共に
先聖の遺響漸く消滅に瀕せるを
思はれて愛惜に耐へざるなり。

然れども科学の進歩は漸く音
響と色相との不二なることを證
明するの域に近づけり。

科学は果して宗教に代り得べ

きか、否か。

葛城野一言主

多田山公口祕稿

葛城野一言主の神事は、惡を善に、醜を美に、邪を正に化育する祕言靈にして「マガゴトモヒトコトヨゴトモヒトコトワレハカツラギノヒトコトヌシノカミノカミワザ」と傳承せるところなり。

人間世界の森羅萬象は善惡美醜正邪曲直の交錯變転にして、寸時も静止することなく生滅遷流しつづつあること、目睹するところの如くなり。

生滅して止まらず、變遷して息まず、流轉して安からず、錯綜して通ぜず、交易の時ならざる現象を判別し整理して正邪曲直善惡美醜を明瞭に知らしむる神徳を「カミ」と稱へて最大の天、最小の地なる絶對なり。

最大最小の天地を葛城野一言主と稱へまつるは神言靈（かみのことたま）にして、其の音義が如是の妙用を現する實相にして、如是の妙觀なるなれば、之

れを「カミ」と稱へまつるなり。されば、「カミ」とは「カツラギノヒトコトヌシ」にてましますなり。

其の音義の妙用とは一音響の神徳にして、實相の照觀とは一圓相の妙音なり。

一圓一音の妙用を妙音觀世音なりと稱ふるは、即「カミ」なりとの義にして、印度佛教に云ふところの阿彌陀佛音なり。

日本民族傳承するところの神言靈に「マガゴトモヒトコトヨゴトモヒトコトワレハカツラギノヒトコトヌシノカミノカミワザ」と稱へまつるは即、阿彌陀佛音にして、此の生死遷轉の現象世界に在りて實相眞如の淨地を築き成すなる祕事なり。

之れを「アマノヌホコ」と稱へ「イザナギイザナミフタハシラノカミ」とまうじまつるなり。

「フタハシラ」とは二柱と古老が支那文字を充當てたる如く「マガゴトモヒトコト」「ヨゴトモヒトコト」の正反對なる二音響にして二圓相なり。

天地なり、陰陽なり、男女なり、雌雄なり、凹凸なり、美醜なり、善惡なり、正邪なり、曲

直なり、明闇なり、日月なり、ヒツキなり、ヒツギなり、天津日嗣なり、生死遷流にして天壤無窮なり、「イノチ」なり、命（みこと）なり、命（おほせ）なり。

而して神魔なり、神魔剖判して同凡に在るなり。

「ハハソハ」と名づけ「ソノトコソイヘ」と教へ給ふところなり。

故に今假に大宇宙の大中心と呼ばん。

大宇宙の大中心とは一圓にして一音なれば、宇宙にあらず、宇宙の中心にもあらずして、宇宙を築き、宇宙の中心を成する一點にして「ヒ」なると共に「メ」なるなり。

之れを「ヒメ」の祕事となすなり。

「メ」とは母胎にして、女陰にして、国土にして、家にして、警境にして、神命なれば「イノチ」なり。

目なり、芽なり、女なり、命（いのち）なり、生死遷流なるなり。

故に「メ」とは「アマテラススメオホミカミ」にして、「ヒメ」とは「アマテラスオホミカミ」にてましますなり。

之れを「イスズヒメ」と称へまつるは「ヒメカミワザ」の「ヒメコトタマ」にして、「カミノコトタマ」なる極大極小の「ヒ」な

真柱

るなり。

「ヒメ」にして「ヒ」なるなり。

故に「イザナギノミコトイザナミノミコトフタハシラノカミ」と称へまつれば「大宇宙の大中心としてのカミ」なりとの義にして、「イザナギイザナミフタハシラノカミ」と称ふる時は「善惡美醜正邪曲直判別の神徳」との義にして、「イザナギノカミ」と称へまつるは「神界築成の神徳」との義なるなり。

其の然るは「カミノコトタマ」の然るなり。

人間造作の名称ならざるは固よりにして、人間歴史上の人身の身魂としての神徳なりとの義にもあらざること、また固よりなり。

一圓一音昭昭琅琅

葛城野一言五

極無極。極大極小。えん火の説明

されど、人間歴史上の人身としての身魂が「カミノコトタマ」としての神徳を顕彰すること、また固より當然の事理なるなり。さればとて、某甲の死後、其の身魂が「イザナギノカミ」にして、或は「アマテラスオホミカミ」にして、亦は「カツラギヌシノカミ」にして、又或は「ニギノミコト」にてましますと云ふにはあらざるなり。

人身としての身魂が大宇宙の大中心に歸入したる時は、生死を隔てずして直に「カミ」たるの御徳を顕彰するが故に、「イザナギノカミ」たり、「アマテラスオホミカミ」たり、「アマテラスオホミカミ」たり、「アメノミナカミ」たり、「カツラギヌシノカミ」たり、「ニギノミコト」たること、一音琅琅として遑際無く一圓晃耀として極無極なるなり。

即身成佛。

衆生得菩提妙吉祥。

妙音觀世音佛。

衆生若有受諸苦惱一心稱名觀世音
即時觀其音聲即得解脫。

念彼觀音力。

妙音觀世音梵音海潮音具一切功
德慈眼視衆生福聚海無量受故

觀世音佛。

即身佛。

現身成佛即身佛王。

發得菩提妙音吉祥。

妙法蓮華經音明品。一切魔軍ナリ一切人善惡ナリト思ハバ魔軍ニテ魔軍ナリ一心想念ニ佛ヲ

衆生若有受諸苦惱一心稱念觀世音

即時觀其音聲即得解脫。稱ハズバ直ニ佛國ナリ極樂世界ナリ之ヲ解脫ナリ

有佛有觀世音ナリ觀世音ナリ梵音ニテ又念彼觀音力妙音觀世音梵音ハ海潮

音具一切功德慈眼視衆生福聚海

即獲威神力ナリ此來此ノノ觀世音佛ナリ極樂

無量阿僧祇劫觀世音佛。世界ナリ

即身佛國現身成佛。觀世音菩薩ナリ

以上 昭和十一年七月三日書寫

此身此^{ホトケ}ア、佛^{ホトケ}、國ナル極樂世界。

此身此^{ホトケ}ア、佛^{ホトケ}、國ナル極樂世界ナリト解^サ脱^ト時^ルハ
此身此^{ホトケ}ア、極樂淨土ナリ妙不可思議界ナリ、

切佛ナリ一切薩婆軍ナル一切佛ナリ。

人^{ヒト}若^ニ苦惱ナリト思ハバ薩婆界ニミテ魔軍ナリ

サト其^{コノ}ミマ一心專念^ニ佛名ヲ稱ヘバ直^ニ佛^ノ、
國ナリ極樂世界ナリト解^サ脱^トナリ大死ナリ涅槃^ニ入^リ

ナリ一切有ナル一切無ナルバ極大ニシテ極小ナリ極無極
ナリ。

稱名ハ直^ニ佛體ナリ妙相ナリ妙用ナリ觀世音ノ
名ヅカルナリ。

一心專念^ニ佛名ヲ念誦スルバ即時ニ妙音ナリ觀
世音ナリ梵音ニシテ海潮音ナリ一切功德ナリ一切
福壽ナリ一切權威ナリ即獲威ナリ佛ナリ此

以上

昭和十一年三月十四日書

菩薩摩訶薩云々云々ナリ。

一身此云々、觀世音佛云々極樂世界ナリ。
此身此云々、佛云々六此身此云々、佛云々世界
上成リ先ナリ成ルナリ、觀世音佛云々觀世音

チチハハミヤミヤサハデノミタマ
父母乃祖乃宗諸有身魂。

發得菩提妙音吉祥。

妙法蓮華經普門品。

衆生若有受諸苦惱一心稱名觀世音即
時觀其音聲即得解脫。ベキナリ

念彼觀音力妙音觀世音 覺音 海潮音
具一切功德慈眼視衆生 福聚海 其音最
故觀世音佛。

父母乃祖乃宗諸有身魂城。

多々オオオニシマスナリ
アホカテシウアイコウシマスナリ。

教愛寮に

於ける講話

多田雄二

一、天帝と人

天神地祇と称する天神の文字を借りて日本の古典は天津神の義に充て用ゐたれども、天津神とは極大極小の比が築き成したる最大最小の點なる莫量圓隣にして直日・大直日・三十六神

界なれば支那人用ゐるところの大神の義にはあらざるなり。

数学家は云はく、最大最小の数と。科学者は云はく、陰極は陽極なりと。見よ。極大極小の比を。又思へ。最大最小の天を。隔つること無く限ること無くして宇宙を構成せるは最大最小の天なり、日本民族伝承するところの天津神にして又国津神なり。

宇宙ならざるの宇宙は極大極小の一にして一切なれば、日本民族は天祖と伝へ天命と教へ命と称し血統と呼びて稜威なる道なり。上下高卑はおるか遠近親疎を立つることなく時間を撤し空間を捨てて一圓昭昭たり一音琅琅たり。

第一章 阿弥陀信仰のひろがり

阿弥陀如来とは、サンスクリット語でアミターユス (Amitayus) 「無量の寿命をもつもの」、アミターバ (Amitabha) 「無量の光明をもつもの」といい、アミタが「阿弥陀」と音写されました。しばしば、漢訳經典ではアミターユスは「無量寿仏」と、アミターバは「無量光仏」とされています。つまり、無明の現世をあまねく照らす光の仏にして、空間と時間の制約を受けない仏であることをしめし、西方に極楽浄土という仏国土を持つ仏が、阿弥陀如来ということになります。

さて、中国から朝鮮半島を経て、日本に仏教が伝来したのは、『日本書紀』によれば、今から約一四六〇年前の欽明天皇十三年（五五二）とされています（五三八年説もあり）。百済の聖明

夜中に如来が善光を背に
伝えられています。か

善光・善助の像を安置、
しましたが、嘉慶二年（
しました。文明三年（

世秀道により異香山光
江戸時代には廃絶し、
ばれ、五輪塔が一基あり

このような善光伝説
地にみられるところで、
る阿弥陀信仰の始まり

中世には、宗派を超え
した。浄土真宗でも、
の化身とされ善光寺信

また善光寺如来と聖徳、
やりとりした伝承が語

を祈る人に対しては身体の安穩を保証するほとけであり、災厄の消除を願う衆生にとってはそのような消除を可能にし、利益のあらたかなほとけがそれに当たり、観音菩薩や不動明王をはじめとする多くの現世利益の力を持つとされるほとけがこれに当たります。

このため、仏の力から見れば応身ですが、その力によって救われる衆生から見れば仏の化生けしょうの力（衆生を化益けやくする力）を持っているということになります。

これまで見てきた法・報・応の三身は、理念的なものと、その現われという違いはあっても本来は一つですから、観音菩薩の頭髮に化仏として阿弥陀如来が描かれているのは、一つの身体で報身（阿弥陀如来）と応身（観音菩薩）があらわされているということです。

阿弥陀如来とは？

来迎らいおう図などにも描かれているように、観音菩薩は阿弥陀如来（阿弥陀仏）の脇侍きょうじとして、臨終の際に迎えて下さるとされていますが、阿弥陀如来と観音菩薩のお二方とも、仏教の根本であるお釈迦さまのお心の二つの面を表わしているだけに過ぎません。阿弥陀如来は釈尊の頭脳（心のはたらき）、観音菩薩は情緒（心情）を表わしているのです。

阿弥陀は「アミターバ（Amitābha）」というサンスクリット語を音写したというのが一

阿弥陀如

阿弥陀如



第一章 阿弥陀信仰のひろがり

阿弥陀如来とは、サンスクリット語でアミターユス (Amitayus) 「無量の寿命をもつもの」、「アミターバ (Amitabha) 「無量の光明をもつもの」といい、アミタが「阿弥陀」と音写されました。しばしば、漢訳經典ではアミターユスは「無量寿仏」と、アミターバは「無量光仏」とされています。つまり、無明の現世をあまねく照らす光の仏にして、空間と時間の制約を受けない仏であることをしめし、西方に極楽浄土という仏国土を持つ仏が、阿弥陀如来ということになります。

さて、中国から朝鮮半島を経て、日本に仏教が伝来したのは、『日本書紀』によれば、今から約一四六〇年前の欽明天皇十三年(五五二)とされています(五三八年説もあり)。百済の聖明王(？五五四)から釈迦仏の金銅像、幡蓋、経論が献上されました。またこの時にもたらされた仏像は『善光寺縁起』によると、一光三尊如来像すなわち信州善光寺の本尊、善光寺式阿弥陀三尊であったともされています。

『善光寺縁起』によれば、仏教伝来当時、崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏との対立もあり、物部氏によつて一光三尊如来像が難波の堀江(現大阪市)に捨てられたといっています。推古天皇十年(六〇二)、信濃国から上洛した本田善光は、難波の堀江に捨てられた一光三尊如来を発見しました。善光はそれを背負い、信濃国麻績里(現長野県飯田市座光寺)に持ち帰る途中、尾張国黒田里(現一宮市木曾川町黒田)で宿をとると、

夜中に如来が善光を背負つて信濃国へ帰ったと伝えられています。かつてこの地には如来像と善光・善助の像を安置した定覚山善光寺がありましたが、嘉慶二年(一三八八)の合戦で廃滅しました。文明三年(一四七一)善龍寺二十九世秀道により異香山光照寺として再興されるも江戸時代には廃絶し、その地は善光寺屋敷と呼ばれ、五輪塔が一基ありました。

このような善光伝説(善光寺信仰)は全国各地にみられるところですが、木曾川流域における阿弥陀信仰の始まりを物語るともいえます。中世には、宗派を超えて善光寺信仰が展開しました。浄土真宗でも、親鸞が善光寺の生身如来の化身とされ善光寺信仰が受容されています。また善光寺如来と聖徳太子が書簡や和歌などをやりとりした伝承が語られるようになり善光寺信仰、太子信仰を包括的に含めた阿弥陀信仰としてひろがりをみせました。

5. 善光寺式阿弥陀三尊 三軀



木像 年未詳 像高 三六・〇

鎌倉時代には一定の共通した特徴をもつ模刻像(分身像)が多数つくられました。善光寺式阿弥陀三尊の特徴は、印相で、中尊は左手の第二指と第三指をのぼす「刀印」を、両脇侍は腹前で一方の掌を上にもむけ、他方の掌をその上にふせる「梵篋印」を結び、阿弥陀三尊像とはいながらも、通常の印相と異なっています。また台座は白様の簡素な形態をとっています。また三尊の後ろには大きな舟形の光背がついています。

2. 黒田宿の善光と善光寺如来

〔尾張名所図会 後編卷之一〕所収



「如来刹光と善光寺
黒田里と我り人図」

明治十三年(一八八〇)刊 一宮市博物館蔵
如来を拾いあげた善光は難波の堀江から信濃国麻績へ帰る途中、尾張国黒田宿で宿をとりました。善光は木の臼の上に真座を敷き、その上に一光三尊如来を安置しました。その夜、如来は善光を背負い信濃国へ帰っていきました。

「大宇宙の大中心」と「サトリ」と「光」^{ひかり}と「神」と「神言靈」

一、妙音觀世音と表現される「音」は、人間身を、解脱悟證させるとしている。

妙音觀世音の妙用は、「一圓一音」とも表現され、「サトリ」とも表現される。

一、「大宇宙の大中心」は、「名無きは、天地の始、名は、萬物の母」とする表現されるように、「天地の始」と「萬物の母」という次元の異なるものが、「共存在」している。

「始」は、素材、構成分子であり、「母」は、全てのものを産出するという「母胎」を意味し、次元は異なるもので、「名」を中心や境界を象徴として、「名無き」と「名あり」というように、区別して、教えている。

一、この無名と有名の統合を、音で感ずる場合には、「一音響」、目で観た場合には、「一圓相」と表現し、人間身をして、感得せしめようとする時は、「一圓一音昭琅々」とも表現され、「極無極・極大極小とも漢字表現される。

一、また、無名と有名の統合を、「唯一不可分のヒ」とも表現され、その存在を、「光」^{ひかり}と表現されている。

一、「名無きは、天地の始^{もと}、名は、萬物の母^{はじめ}」という表現を、聖書でも「初めに言（ことば）ありき、言は神なりき」と表現し、また、「初めに光^{ひかり}あり、光は神なりき」と表現されているように、「大宇宙の大中心」を、「神」としての「光^{ひかり}」であると表現することができるとしている。

萬葉集講話 (三)

多田雄三

大宇宙の大中心としての事實と眞、仏徒の所云、事と理、事理不一不。これを觀自在身と呼ぶことができ

觀自在身といふのは、大悟徹底の身、解説身であるから、古人はこれを、

玉とも白玉樓ともいって、支那文字は、皇と書いてある。皇は白玉の合

で、水精宮の義である。また、国と

書く。口と玉との合成で、白玉樓閣

義である。宇内の意で、築成建国を

へてをる。□は宇宙で、經と緯とで、

は緯で緯は經であるところの極大極

なると共に、經のあるのは緯のあるの

緯のあるのは經のあるので、つまり、

宙で、宇宙とは經緯であるから、箇

で小經

體で、各類で、各界で、大小長短明闇美醜正邪曲直と千様萬態なのである。

其の千様萬態であるところの宇宙を、

明瞭瞭に照觀し得るところの箇體であ

るとの意味で、□の中に玉を置いたの

である。白玉樓閣であるから、淨土な

ので、皇土なので、高天原で、天國で

ある。これを觀自在身と呼ぶ。觀自在

菩薩といふに等しいのである。

日本民族の傳へて來た言靈の「ナホ

ビ」に、この觀自在菩薩といふ名は相

當するので大宇宙の大中心といふ義に

なるのである。

大宇宙の大中心といふのは、箇體無

き箇體といふ義なので、無宇宙の宇宙

なので極大極小なので、一音響で一圓

相なので、世界無き世界、人無きの人

なのである。

人無きの人は、其の實體を命と呼び、

其の妙用を尊と稱するので、支那文字

を借りて二様に表現したので、日本語のみならば、「アメノミオヤ」が命で、

「ミコト」は尊の字を用ゐたのに當る

のである。

それは丁度、仏の語が「アメノミオ

ヤ」に當るのに對して、觀世音菩薩の

義が「ミコト」に當ると等しき關係で

ある。

それだから、仏とは大宇宙で、觀世

音菩薩とは大宇宙の大中心としての宇

宙であるところの觀自在身である。

その觀自在身であるところの「ナホ

ビ」といふのは、事實と眞理との不二

一體である「アメノミオヤ」の妙用で

あるから、二重相で一圓相で體と用と

の不二であるところの事と理との不二

不二三三で、すなはち、梵音で、海潮

音で妙音觀世音で、一音響である。

日本民族の傳へて來た言靈の、「ナホビ」に、この觀自在菩薩といふ名は相當するので大宇宙の大中心といふ義になるのである。

大宇宙の大中心といふのは、
全體無き全體といふ義なので、
無宇宙の宇宙なので極大極小なので、
一音響で一圓相なので、
世界無き世界、人無きの人なのである。

人無き人は、其の實體を
命と呼び、其の妙用を尊と稱する
するので、支那文字を借りて二
様に表現したので、日本語のみ

なつて、「アメノミオヤ」が命

で、「シロ」は尊の字を用ゐる

たのに當るのである。

それは丁度、佛の語が「アメノミオヤ」に當るのに對して、觀世音菩薩の義が「ミコト」に當ると等しき關係である。

それだから、佛とは大宇宙で、觀世音菩薩とは大宇宙の大中心としての宇宙であるところの觀自在身である。

その觀自在身であるところの「ナホビ」といふのは、事實と眞理との不二一體である「アメノミオヤ」の妙用であるから、二重相で一圓相で體と用との不二であるところの事と理との不二不二三で、すなはち、梵音で、海潮音で妙音觀世音で、一音響である。

古人が「ナホビ」といふ神言
靈に、直靈の支那文字を充當し
たのは、靈の直く正しくして、
妙用を現はすといふ意味なので、
靈の字を解けば、すぐに知るこ
とができるのである。

靈は、零と讀む。

零とは空零で、○で佛教にい
かところの五蘊皆空の義で、六
根で六趣で、五に封するの六で、
中心無きもので、宇宙を築かざ
るものであるから、箇體でない

のである。

空零の下に「𠄎」「𠄎」の二文

がある。

000

「巫」はまた、「工」と「从」
との合成で、「工」は机で臺で、
象形の文で、高杯の形である。

「从」は人で、兩人で、「工」
の下に恭敬奉侍の指事が「巫」
である。「カムナギ」である。

その上の「𠄎」、「𠄎」、「𠄎」
などと書いたのは、物の象形で
指事で、多くの幣物を表示して
をる。

「𠄎」が多数だとは数理なの
である。

三

巫が多くの幣帛を捧げて零の
下に、蹠躅と跪いて居る。

これが、靈の字義なので、五
蘊は皆空、皆空であつて異靈奇
怪である、との意を示して居る。

その奇靈の正誠正義の妙用妙
相が「ナホビ」であるから、と
の意に依つて直靈と書いたので
直靈とは妙音觀世音で、觀自在
身であるところの觀世音菩薩な
のである。

古人が「ナホビ」といふ神言
靈に、直靈の支那文字を充當し
たのは、靈の直く正しくして、
妙用を現はすといふ意味なので、
靈の字を解けば、すぐに知るこ
とができるのである。

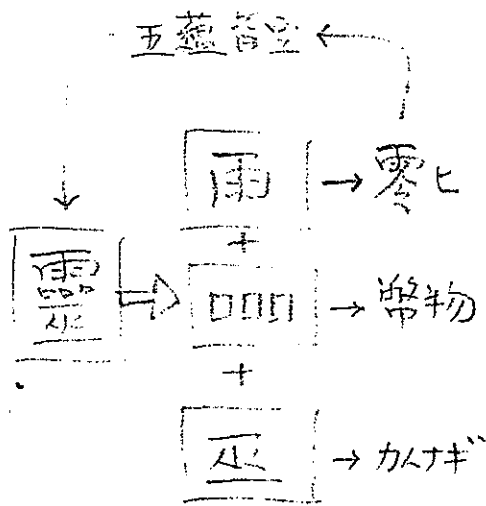
靈は、零と讀む。

零とは空零で、○で佛教にい
ふところの五蘊皆空の義で、六
道で六趣で、五に封するの六で、
中心無きもので、宇宙を築かざ
るものであるから、箇體でない

のである。

空零の下に「𠄎」「巫」の二文
字がある。

靈の雨は零の意味。



この文字自体は
單字「奇靈」の意味
ナホビ

↓ ナホビ
直く正しい奇靈に
限る。

直靈と解する。
ナホビ

「巫」はまた、「工」と「从」
との合成で、「工」は机で臺で、
象形の文で、高杯の形である。
「从」は人で、兩人で、「工」
の下に恭敬奉侍の指事が「巫」
である。「カムナギ」である。
その上の「𠄎」、「𠄎」、「𠄎」
などと書いたのは、物の象形で
指事で、多くの幣物を表示して
をる。
「𠄎」が多数だとは数理なの
である。

三

「巫が多くの幣帛を捧げて零の
下に、躑躅と跪いて居る。」
これが、靈の字義なので、工
蘊は皆空、皆空であつて異靈
怪である、との意を示して居る。
その奇靈の正誠正義の妙用が
相が「ナホビ」であるから、
の意に依つて直靈と書いたの
で直靈とは妙音觀世音で、觀自在
身であるところの觀世音菩薩か
のである。

萬景集講話(二)

多田雄三

暴風だ、猛雨だ、雷鳴だとか、鳥歌、獸聲、海音、泉聲、松籟、鬼笑、神韻とか、天音と称へ、玉音と呼ぶも、皆共に音聲である。

その音聲は、人の聞き知るところで、別に不思議はない。

假令、電話とか、ラヂオとか云ふように、機械の力を借るとしても、音聲といへば、人は聞くべきものと決めて居る。

また聞きつつあるので、聲聞僧の圖を古人が書いたものにも、海岸に立ち潮音に対する意味を示して居る。

けれども、海潮音は梵音で、梵音とは妙音觀世音で、それは、「其ノ音聲ヲ觀テ、皆共ニ解脱ス。」と説明してあるとほりで、

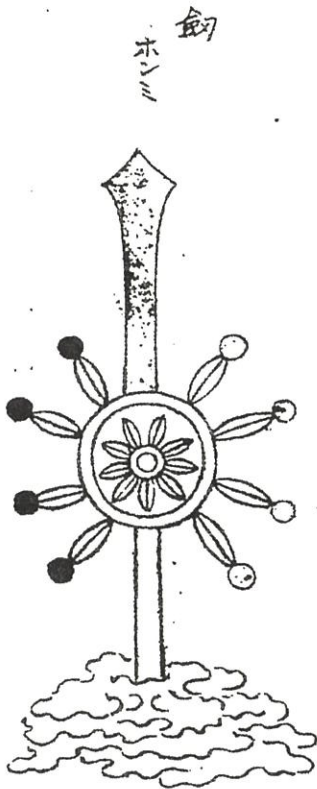
音聲を觀て、解脱悟證するのである。

これが「サトリ」で觀世音で佛で浄土なので、一音響で一圓相だと教へたのが佛佛相傳

の祕言靈で、大宇宙の大中心との義である。

その大宇宙の大中心は、「名無キハ天地ノ始、名ハ

八握劍



山多田雄三先生の筆蹟

すべてのもの 萬物ノ母。」と指示したところの、無名と有名との一音響で、一圓相なので、それを、「初二

言存リ、言ハ加美ナリキ。」

と傳へた「言」で「加美」で、

同時に、「初二光存リ、光ハ加

美ナリキ。」と教へたところの

「光」で「加美」であるところ

の「日」となすので、極大で極小で極小で極大であるところ

の極大極小で、極で無極で無極

であつて極であるところの極無極で、盡天盡地の「ヒ」で無際無涯の「ヒ」で唯一不可分の「ヒ」で如來去來の「ヒ」で成住壞滅

の「ヒ」であるところの「命」で

「尊」で「天祖」で「日止」

で「火止」で「火」で「日」で

「天津神」で「國津神」で「加

美」で「加牟」であるとの意である。

目には一圓相で、耳には一音響で、その機能に應じて名を異にし用を別にするのである。

音聲は音聲でも、鳥獸の音聲は、人類の聞き分け難しとするところで、風雨雷霆の音響は、なほさら、人には判別が付かぬのと等しく、萬類萬物の相違各別なのは、各類各界は各類各界としての構成を各別にしてあるから各類があり各界があるのである。

此の類別は、内容でもあり外形でもある。

それと等しく、歌詞の類別も、内容の相違と共に外形もまた異なるは當然である。

大宇宙の大中心としての事実と眞理、仏徒の所云、事と理、事理不二。

これを觀自在身と呼ぶことができる。

觀自在身といふのは、大悟徹底の身で、解脱身であるから、古人はこれを、白玉とも白玉楼ともいって、支那文字では、皇と書いてある。

皇は白玉の合成で、水精宮の義である。

また、国とも書く。

□と玉との合成で、白玉楼閣の義である。

宇内の意で、築成建国を教へてをる。

□は宇宙で、經と緯とで、經は緯で緯は經であるところの極大極小なると共に、經のあるのは緯のあるので緯のあるのは經のあるので、つまり、宇宙で、宇宙とは經緯であるから、箇體で、各類で、各界で、大小長短明闇美醜正邪曲直と千様萬態なのである。

其の千様萬態であるところの

宇宙を、明瞭瞭に照觀し得るところの箇體であるとの意味で、□の中に玉を置いたのである。

白玉楼閣であるから、淨土なので、皇土なので、高天原で、天國である。

これを觀自在身と呼ぶ。觀自在菩薩といふに等しいのである。

日本民族の傳へて來た言靈の、「ナホビ」に、この觀自在菩薩といふ名は相當するので大宇宙の大中心といふ義になるのである。

大宇宙の大中心といふのは、箇體無き箇體といふ義なので、無宇宙の宇宙なので極大極小なので、一音響で一圓相なので、世界無き世界、人無きの人なのである。

人無きの人は、其の實體を命と呼び、其の妙用を尊と称するので、支那文字を借りて二

様に表現したので、日本語のみ

ならば、「アメノミオヤ」が命

で、「ミコト」は尊の字を用ゐ

たのに當るのである。

それは丁度、佛の語が「アメノミオヤ」に當るのに對して、觀世音菩薩の義が「ミコト」に當ると等しき關係である。

それだから、佛とは大宇宙で、觀世音菩薩とは大宇宙の大中心としての宇宙であるところの觀自在身である。

その觀自在身であるところの「ナホビ」といふのは、事實と眞理との不二一體である「アメノミオヤ」の妙用であるから、二重相で一圓相で體と用との不二であるところの事と理との不二であるので、すなはち、梵音で、海潮音で妙音觀世音で、一音響である。

古人が「ナホビ」といふ神言靈に、直靈の支那文字を充當したのは、靈の直く正しくして、妙用を現はすといふ意味なので、靈の字を解けば、すぐに知ることができるのである。

靈は、零と讀む。

零とは空零で、○で佛教にいいところの五蘊皆空の義で、六道で六趣で、五に封するの六で、中心無きもので、宇宙を築かざるものであるから、箇體でない

のである。

空零の下に「𐄂」「巫」の二文字がある。

「巫」はまた、「工」と「从」との合成で、「工」は机で臺で、象形の文で、高杯の形である。

「从」は人で、兩人で、「工」の下に恭敬奉侍の指事が「巫」である。「カムナギ」である。

その上の「𐄂」、「𐄂」、「𐄂」などと書いたのは、物の象形で指事で、多くの幣物を表示してをる。

「𐄂」が多数だとは数理なのである。

巫が多くの幣帛を捧げて零の下に、蹠躅と跪いて居る。

これが、靈の字義なので、五蘊は皆空、皆空であつて異靈奇怪である、との意を示して居る。

その奇靈の正誠正義の妙用妙相が「ナホビ」であるから、との意に依つて直靈と書いたもので直靈とは妙音觀世音で、觀自在身であるところの觀世音菩薩なのである。

歌詞として、極大極小の事理を詠出した場合には、この妙音觀世音なのであるから、五種類に分けたうへでは、神界事理の